ただ一人回答紙をくれた人

鈴　木　範　久
（昭和35年修士修了）

そのころ，岸本英夫先生のゼミは，大学院の講義のなかで，もっとも生き生きとし，充実していた。受講する学生たちが一回ずつ順に発表する形式は，今日も受け継がれているかもしれないが，それに現役の学生よりも時には多いほどの先輩たちが参加しているところに特徴があった。

論文の中間発表の性格をもっていたので，発表後の批評で徹底的にやっつけられると，もうその年に論文を提出することはむずかしくなる。発表がうまくまとまらず，だらだらと時間を超過していると岸本先生からドクター・ストップがかかる。そうなると絶望的だ。

先輩のなかには，発表の時は眠っていて，批評の時だけ加わる猛者がいた。こういう人の質問にも，まともに答えなくてはならないから発表者はたいへんである。

私が，はじめて柳川啓一という先輩にめぐりあったのは，このゼミのときだった。若手の先輩たちのなかで，期待されている人物二人の名前（乞う御想像）を，ある先生から紹介されたことがあったが，そのなかに柳川啓一という名前はなかった。それでも，なんとなくボサッとしている風貌だけは，前から見かけて知っていた。岸本先生の他の授業に，すっと現れては後方に坐って聞き，またすっと消えていたからだ。岸本先生の出版予定の本をまとめている人という噂を耳にし，出版社の人かと思ったりした。

岸本ゼミで私の発表の番がめぐってきたとき，時間の都合で十分意見のいただけない人のことを考え，私は，配布した資料のあとに意見を書き入れる欄を特設した。

このアイデアははじめてのことだったので，岸本先生はちょっとばかり感心したかのような言葉を洩らした。ところが回収率はさっぱりで回答はたったの一通しかなかった。それが柳川先輩のものだった。

その貴重な回答紙には，三，四点の意見がぎっしり書かれていた。発表後，さっそくこのことを感謝すると，もっとくわしく説明をしてもらうことができた。この出来事を通じて，私ははじめて柳川先輩と言葉をかわし，その頭のよさと心のあたたかさとを知ったのである。

しばらくして柳川先輩は，東大にこられて柳川先生になったが，そのころ反対に地方に行って働くことになった私は，ほとんど謦咳に接する機会をもてなかった。学会の折，嘲風会に出席したところ，柳川先生が末席で司会することになり，大先輩の名前をまだよく知らないために，小口偉一先生を顧問にして助言とささやきを受けながら，必死に司会をしている姿がほほえましく（今とは隔世の感），強く印象に残っている。

その後ふたたび帰京したものの妻子をかかえていた私には，生活が第一であった。柳川先生から仕事をいただいたり，お仕事のお手伝いをするようになり，今度は別の面からその人となりに接することができた。なかでも特に記しておきたいことは『宗教学辞典』の前史ともいうべき話である。

友人の一人が大手の出版社に勤めていて，その男と話しているうちに宗教辞典を作る話がもちあがった。話は出版社の辞典の課長と柳川先生との会談をへることによって急速に具体化し，編集委員が内定する一方，私も項目選定の作業にとりかかった。

日本（いや東洋）最初の宗教学辞典を作るということで，柳川先生も，その驥尾に付して私もおおいに意欲を燃していた。話はどんどん進み，最後の詰めを出版社の局長としたとき原稿料のことが持出され，それが常識をかなり下まわっているのには少し驚いた。それでも柳川先生は，辞典の刊行に使命を感じていたので，やる気十分だった。

ところが，出版社側の最終提案を編集委員会にはかったところ，「そんな原稿料は失礼」であると一蹴され，計画は水泡に帰してしまった。ただ一人刊行に固執し稿料よりも「精神主義」を主張したのが柳川先生であった。

幻の編集委員会が終り二人だけになったとき，刊行の中止を憤満やるかたない口調で嘆いたその顔の烈しさが忘れられない。

時移り，幸いにもこの企画は東大出版会によって実現されることになった。準備したものも若干はいかされた。残念ながら，私は勤務校で起った紛争のため，ほとんどお手伝いできなかったが，『宗教学辞典』刊行の蔭に甚大な苦心をはらわれた柳川先生の働きは，知る人ぞ知るである。

刊行記念会の席で出版会側の担当者の言った言葉を思い出す。

「これで最後という日に柳川先生は急に腰がぬけて立てなくなった。血を吐いたというと恰好がよいのに，そうでなかった」

すべて恰好の悪いのは柳川先生の野球のフォームにもいえるのである。